特集

経験ゼロからの挑戦

義父から受け継いだバトン



下妻市の豊かな自然の恵みを受け、日々進化を続ける米作り。全国的に農家の高齢化や後継者不足が課題となる中、下妻市で次世代の農業モデルを体現している鈴木秀史さん。
元・ガス会社の営業マンだった鈴木さんは、ある日突然、未経験のまま広大な農地を引き継ぐことになりました。右も左もわからない状態から、いかにして「関東農政局長賞」を受賞するまでに至ったのか。亡き義父の想いを胸に、頼もしい相棒「スマート農業」を取り入れ、力強く歩みを進める、鈴木さんの挑戦と軌跡をご紹介します。

突然のバトンタッチ。田んぼの場所すらわからなかった



龍ケ崎市出身の鈴木さん。東日本大震災によって下妻市の奥様の実家が被災したことを機に、家を建てて移り住みました。

現在結婚19年目となる鈴木さんが農業の世界に飛び込んだのは、令和2年のこと。義父が入院した際、「将来は農業を一緒にやってほしい」と頼まれたのがきっかけでした。

「その時は、退院したら一緒にやりながら指示を出してもらえるものだと思っていました。でも、そのわずか1、2週間後、義父は急逝してしまったんです」

農業について何も教わることができないまま、突然約20ヘクタール（就農当時）もの農地を継ぐことに。近所の方からは「農業はそんな甘くないぞ」と心配される中でのスタートでした。



田植え機は無人での走行も可能

「最初は、どの田んぼが自分の管理する場所なのかすら分かりませんでした。そんな時、市役所の担当者の方が、あちこちに散らばる田んぼの場所を色塗りした地図を作って用意してくれたんです。さらに、親戚や近隣の農家さんたちも温かく手を差し伸べてくれました。右も左もわからない状態から、農作業の基本や機械の扱い方を一から丁寧に教えていただき、本当に救われました。」

生前、義父は「いざ家を継いだ時に無理なく生活できるように」と、経営基盤をしっかりと整えてくれていました。義父が残してくれた道標を頼りに、鈴木さんの挑戦が始まりました。



ドローンを活用し農地を効率的に管理